

## 来目路乃橋

菅江真澄の旅行記。天明四（1784年）七月廿六日、及び三十日の項

秋田叢書・別集 第4（菅江真澄集第4）より。

廿六日。戸隠山にのほりてんとて善光寺のしりよりわけて、野行山路に入て御歳宮八幡をまつるを右に見て、湯福諏方の神を祭るの社といふに鳥居あり。汐澤といふ處の山、なからはかりのほれは、いかめしく造れる四阿のありけるは、野遊の人々圓居して「いにしへの七賢き人ともほりするものはと、酒のみける所となん。路のかたはらに家二三あるしりより、いと冷やかなる湯のわきつるところあり。加都良山の麓をゆくに、朝露いとふかし。

風ならてうらみる葛のかつら山分る袂にかかる白露。安樂夜珠といふ處に休らひてよもやもを見れば、遠のやましく、波か鱗とかさなれり。大窪といふ處の館に水こひてのみて、いとよけんといへは、やのあるしも童も口をそろへて、この山は水いとよし。芋井の里はすこしぬるけれど、鳴子清水の外よき水はあらしかし。またものみね、とすすむ。中院にまうてぬ、ここにあかめて思兼命を祭る。このみまへを左にのほれば、比丘尼石、観音ほさちの堂あり。麓より女、この堂を限にまうててそ、みな歸りにける。はた寶永の頃、長明といふすけの入にし火定のあととて、石ふみにゑりたる。兒塚といへるところも過て、奥院にまうてんとてみさかのほれは、いや高きいはほに大なる御社を造そへて、ひろ前に清らをつくしたるは、かしこくも手力雄命のおましますに、龜のすかたの文ある、玉たれのをすのひまこそ見へね、ぬかつきて奉る。

かくれます天の岩戸をひき明し光世にしる神や此神。  
みほくらの左のしたつかたに、あゆみとののこくとく、いは  
やの上におほひて、うちは、ひめとさしたる、をかみとの  
あり。こは九頭龍権現とて、かうべ九ある、たかをかみを  
祭る。いはやとといふに下りてまうてぬ。齒の病ある人  
は、一期のうち、梨子をくはさるのちかひしていのれは、  
かならず其験のありといふ。ふりあふき見る嶺を、荒倉と  
いふ。そこに栖し赤葉もみちといふ妖鬼おにに餘五將軍平維茂卿むか  
はせ、もみちたるおもしろき林に幕うちめくらし、ちりつ  
みし紅葉をかい集め、さすなべにみきあため、いみしう  
きようをさかせけるとき、かの妖鬼、はかられ出て、附子どく  
かみしなしたる、みきに酔ふしたるを、うかかひ斬たひら  
け給ひしところを、いま附子野ぶすとてあり。竈段かまのだい、幕入まくのいりなど  
いふ名の残り、又志垣村といふ處あり。紅葉狩のうたひも  
の語にも、「志籬の路のさかしきに落來る鹿の聲すなり。」  
とそつくり聞へける。(天註 夫木集、仲正。山賤かねらふしかき  
やしけからんぬまの月の出よさりする。) 妖鬼むけ  
たひらけ給ひては民やすけん、今は鬼なけんきなさと悦ひ、そこ  
の名を鬼無里とて、紙漉く村の近となりにならひたり。荒  
倉山の名を紅葉山とも、又霧見か嶽ともいひて、千代ふる  
木々、枝をたれ茂りあひてけれと、杣、山賤らか攀踰るへ  
うことあたはねは、木々は友すれに朽かれ、うち見やるた  
にいやくらく、雲霧つねにたへす嶺をおほへは、霧見てふ  
名の、うへもありけるにやあらん。此山のあたりをも園原  
といひて木賊いと多く、はた柳草といふもの多し、岐岨の  
山のねつつきなれば、しかいへるにや。(マ) 維茂の卿むかし鬼  
むけたひらけ給ひし日は、七月七日八日九日、此三日なれ  
は、今もなか月のその日、顯光寺にて紅葉會とて、千入に  
もみつる楓の葉をかい集て、たかつき、くほつきやうのも

のにもりて三日のうち、その鬼のなきたまをとふらひ給ひ、この行ひはつれば手向し紅葉残りなう作花につつみ、くづりうのいはやとにをさむれば、その赤葉一夜のまに、越のうしろくに、尾崎といふあら磯に、いつるといひつたふる也。このふん月七日のかんわさは柱祭とて、いと高き柱を三もと立て、この柱に、三のかんやしろのみなをたくへて、立たる、はしらのうれことに柴をつかねて、火をさとはなちてとくしそき、これをあふき見て、すみやかに火のうつり柴のもへあかるは、いつれの神のおほん柱そと見て、其年の田のみ、よしあしの、うらひをなんせりける。このとしは手力雄命のおほんはしらに、火はやうかかりてかちたまへは、此としのたなつものやよけん。見たまは

は、又此裏山に涌わくの池といふありて、其ほとりにたちてわくくと呼は、朽木の水底にしつみあるか、うこもち、ゆらゆらと涌出る處もあり、あなひといきね。此みかしぎやの南にあたりて、晴たる日は不盡のいとよく見ゆるなど、九頭龍の窟に、日ことに、もの供したひまつる老法師、わらはをいさなひ歸り来て、此山のあらましを語り聞へたり。かくて中院にまかり歸りて勸修院に入て、あるしのたいとこをとふらひてんと門に音なひて、

たひ衣立こそとまれ言の葉にみかける玉の光見んとて。  
比ことけいし奉らんかなれととて、たいとこにかはりて、  
尋ねこし王の光も難波江の藻に埋るる賤の言の葉。  
といふ歌を、光忠といふ士の作りける。かくて大とこの返しありけり。

普

旅衣はるく来てても足曳の山のかひある言の葉もなし。

ふたたひおくりける

光

忠。

たひころも木曾河越へて見る影もなみくならぬ玉の  
言のは。

比叡の山より來て此寺にすめる亮觀といふすけ。

千嶂銜煙雨 秋陰帶暮陽 投來衣裏璧 別傍明月光。

といふ、しるんつくりて又、

ことの葉のひかりならすはいかにして藻くすを玉と人  
にしられん。

と、ふたくさをむくはれたり。かくて、此寺に近き家に宿  
つきぬ。女の童雨ふれくといふに、いろはにやあらん、  
かまけるな、こよひはふりなん、雲のたたすまゐいとよ  
し。ことかたはをりくふりけれど、此山は水無月十日斗  
にふりたるまま、小雨たにそほふらて、ものみなかれうせ  
なんととに立ていへは、わらは、わかうへたる山櫻草、玉  
すだれもかれ行ぬとて、ちいさき岩のあはひにあるに、水  
もてそそきありく。

いく世々といはねに生る玉簾かけて久しき根さしなる  
らむ。

くれ行は、あるしの翁、くろ木のをまくらとり持ち投出し  
て、そへれといへは、ふしたり。

廿七日。つとめておき出れば、高根のしら雲ふかうかかり  
て、ひまくに、岩群のもりあらはれたるは風情こと也。

日の光四方に見つらし明らけくあけ初にけり戸隱の  
山。

けふは、御射山祭のいはひとて、紅豆の飯を家ことにたき  
て、青箸とて薄、あるは、かやの折はしにてもものくひ、神  
のみまへ、阿伽棚にも尾花をり手向たるは、此國のならば  
し也。やを出て、ひのみこのふた櫻とて二本ある櫻あり。  
この樹、春ことにも花さかねと、としふり名ある木也と  
て、人のあなひしてをしゆ。この祠には拷幡千千姫をいは

ひ、寶光院の祠には表晴命をまつり奉るとなん。鷹ひとつ鳥をかけ落とし、よこきる羽音すさまじ。こや、けふにあへるは、「刈て暮く穂やの薄の美作山にかまはやふさや御鷹なるらん。」と、なかめありける歌の如く、鎌鶺といふものにてやあらん。かまはやふさは、翅の羽すゑに鎌のことなるところありて、鳥の頸かいきるとも、又はやふさの爪の、やいかまの、とかまのやうにて、よく鳥をかき切ける。そのはやふさを、けふのみさやまに、むかしはかならず出て諏訪の神の贄になれば、この名を贄鷹ともいひ、手向丸ともいひて、かならず逸物のいてくもの也と世にいひつたふる、それにてやあらん。

鷹の名のかまはやふさは刈てふくほやのめぐりにけふや出らん。

みつなやま

飯縄山の麓の原に雨ふり出て、たとるくそほぬれて、みちふみ迷ひほそちに入れば、子ひとつ連たるあら熊の、高草をけたてて、あか行前をよこきれてはしり過る。おそろしさ、たましゐ身を離れたるここちなから、猶その行かたを見やりつつ、

月の輪のかけ見るほともあら熊のさし入かたは山ふかくして。

軍陀利村をいつれは、谷ふかう、おかしく落くる瀧あり。

揚屋村をへて、櫻といふところあり。

村の名のさくら麻苧を糸によりていとなく衣をらん乙女子。

(略)

三十日。このやかたを出て、ささやかはやひとつある處に至れば、野尻の湖なこりなう見へたり。

(略)

關のあら垣に入は、越呉のくに赤河の里也。渡來し河のあなたに熊坂村といふあり。長範のぬす人の魁は、この村に生れしといふは、ことにて待ると、ものしりかほなるおほちひとり、斧さしたるか、われにかたりつつ氣破必左加といふにのほり、石のうへにたち休らひかへり見れば、かのふるおほぢ、見たまへ、高き山はしなのの飯繩山、戸隱山、此國の妙光山也。こや、妙光山は有明のみねといふといへと、科野路にも其名聞へたり。此たくひは、姨棄山の外に、芋井の郷の近き邊にも更級といふ處あり、山を、さらしなの山とも更級崎ともいひて、月の田といふか四十まり八まちありといふ。

註 近代デジタルライブラリーに画像あり。「秋田叢書・

別集 第4（菅江真澄集第4）」（DOI

10.11501/1174008）の265-268コマ目及び272コマ

目。『新編信濃史料叢書』第十巻にも翻刻がある。